

姫奴淫落

淫らなる晚餐

サーニャ編

夜士郎

表紙イラスト：鈴音れな



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『姫奴淫落 淫らなる晚餐 サーニャ編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



姫奴淫落

淫らなる暎養

サーニャ編

夜士郎

表紙 / 鈴音れな

登場人物紹介

Characters

サーニャ・クレスト・スラルド

サッシーナの隣国、スラルドの王女でエクレアの親友。ロリ体型の子どもっぽい性格の姫君。

エクレア・ノル・サッシーナ

小国サッシーナの姫。ブロンドの長髪と豊かな肉体の母性的美貌をそなえた、慈愛に満ちた王女。

そして牢の中にはただ一人の少女が残る。

彼女の名は、サーニャ・クレスト・スラルド。

サッシーナと同盟を結ぶ、スラルド国の姫君である。

お転婆で、さんざんと両親を悩ませた少女である。サッシーナの姫君とそれほど年齢は変わらないはずなのだが、豊満な体つきの彼女と違い、サーニャの身体はまるで子どものそれだった。

伸びたての若竹のように、瑞々しくも細い四肢。

薄っぺらい胸。

顔つきも幼げで、柔らかそうな頬が愛らしい。

黒と白とのコントラストも鮮やかなドレスをその幼体に纏っている。黒生地を主体にして、白いフリルの振り分けられた造作は、喪服にも通じるところか退廃的な妙を描き出す。ワンピースではあるが、スカートは短めで、太股の半ばまでもない。肉つきが薄く細い脚は、膝の上までを真つ黒なソックスに包まれている。

全体的に、色彩の乏しい恰好だ。

だからこそ、ウサギの耳のように左右から伸びる、ピンク色のツインテールが鮮やかに映えていた。

まるでお人形さんみたいだと、みんなから可愛がられたサーニャ姫である。

父や。母や。王族のみんなや——エクレアに。

けれどいまは一人だ。

もう、この身体を包み込んでくれるひとはいない。

「う、うう……うううう……」

父も、母もいなくなつて、エクレアまでどこかへ行つてしまった。

小さな胸を掻き抱き、サーニャは身体を震わせる。あの、悪名高きパノルゴスの連中に連れ去られていったのだ、いまエクレアはどんなひどい目に合わされていることか。

幼い頃に知り合つて、すぐに仲良くなつた。

姉がいれば、こんな感じなのかなと思つていた。

そんな彼女が受けているであろう恥辱を思うと、いてもたつてもいられなくなる。

サーニャを救うために、あの聖女は一人、敵地へと歩んでいったのだ。

「……私、は」

私もエクレアを助けない。彼女を救い出したい。

優しく、人と争うことなどできもしないエクレア。気丈に振る舞つていても、パノルゴスの男たちに囲まれて、怖いに違いないのだ。

いま何をされているかわからないけど、ものすごく嫌な、泣きたくなるような目にあつているのだろう。だから、助けない。助けてあげたい——！

「……いたつ。痛たつ！　い、たい、うううう……」

牢獄に、可愛らしくもわざとらしい苦悶の聲が鳴り響く。

何事かと看守が振り返った先で、サーニヤが蹲っていた。

「……なんだ、おい。どうした」

「お……おなか、お腹が痛いの……助けて……」

額に汗を浮かべて描く澁面は、少女の苦痛を色濃く映し出していた。お腹を抱えた手の内で、肉がちぎれそうなくらいに皮膚をつまみながらサーニヤは呻き続ける。

「ああ？　腹が痛いなあ？　そのくらい我慢しろ」

「が……まん、できない……おなか、破裂しそう……い、いたたつ……」

真に迫るサーニヤの苦鳴に、看守は逡巡する。このまま放置をすれば、なにか重篤な状態へと変わるかもしれない。これからも使い道のある少女である、もし死なせてしまつては、己の責任問題へと発展するのではなからうか。

「つたく、しょうがねえ。医者に診せるか——」

と、上に報告をすることもなく牢の鍵を開け連れ出そうとしたのが看守の落ち度であった。見た目十かそこの少女が脱獄を謀るなど、考えもしなかつたのだ。

牢内へ入り、サーニヤへ近づく。その時であった。

突如として立ち上がった少女の、弧を描く細足が看守の股間に叩き込まれる！

ぐちゃりと嫌な音がして、「ウムグツウ!」と男の目が裏返るのは、お転婆な姫君が習い覚えた護身術の賜であった。うずくまる男を打ち捨てて、少女は牢の扉を開く。

どうすればよいのか、どこへ行くべきかなどまるで考えていない。

ただエクレアを救いたい一心だ。

そうして駆け出そうとして——その足は絶望に立ち竦む。

「あ……」

出入り口、上階へと続く階段の下に、また、別の兵士が現れていたのだ。

「どこへゆこうというのかね」

その男はにいと嗤うとサーニヤのもとへ近づいてくる。

「くっ……てやあつ!」

股間めがけて蹴上げた片足はあっさりと掴まれて、持ち上げられ宙づりにされてしまう。

「きやあつ!?! ちょ、ちよつとつ、離しなさいよつ」

可愛らしい薄桃色のパンティとニーソックスの根本で肉付き薄い太股を丸出しに、サーニヤは抗議する。パンティは、お臍まで隠れそうなくらいに大きめで、幼童が履くもののように幼げだ。それを見せつけながらジタバタと暴れるお転婆な姫君を男は愉しげに観察していると、

「さあ、では行こうかサーニャ姫。お前の出番を待ち望んでいる方々がいるのだ」

「……なっ、あ、あなたたち……約束を、破る気……?!」

エクレアの献身に、サーニャは護られたのではなかったか。

その猶予を利用しようと、脱獄を企てたというのに。

「この……卑怯者っ！ 馬鹿っ、アホーっ」

「……まったく、元気のいいお姫様だ」

掴まれていない足を振り回してサーニャは兵士の身体の内ちこちを蹴りまくる。彼はそれを意にも介さず、股間に振れるパンティが肉の溝に食い込んでゆく有様を好色な視線で廻りながら、ぶら下げたままの少女を連行してゆく。

「着いたぞ。ここだ」

やがて訪れた一室には円卓があった。馬蹄のような楕円の、一部が欠けた円卓である。何人もの男女がその円卓を囲んでいる。

金糸銀糸を織り込んだ、煌びやかな衣服に身を包み、この世にある全ての貴金属を装飾品にしたような彼らは、おそらく、パノルゴスの王族たちだろう。

食事の最中なのだろうか、卓上には肉、魚、ワインとパンと、贅を凝らして盛りつけられた料理が並べられていた。

ぎゅう、とお腹が鳴ってしまう。牢ではろくなものを食べさせてもらえなかった。

「オウウグウウウっ!! えごぼっ……ごぼおぶうっ……!!」

苦しげに胸をしやくりあげるサーニヤ、けれど豚舌はさらに奥へと容赦なく、喉肉を拡張しながら侵略してゆくのである。

凄まじい圧迫感に脳が焼け瞳孔を剥く。滂沱ぼうたと溢れ出す涙、顔面が真っ赤に染まる。

「うぐううう~~~~っ! ひぐっ、ひやぐっ……! はぐううっ!」

パンティを丸見えにしてバタバタと暴れる黒色の幼脚が少女の苦悶を物語り、王族たちはそれを指さし笑うのだ。

「おうおう、小さな足が必死に暴れとるわい」

「身体じゅうが赤くなつてますね。私はあれが好きなんですよ」

「息できなくて、死んでしまわないか? まあそれならその時か。はは」

まるつきり少女の身体に頓着しない愉しみようだ。

(く……くるし……しぬ、死んじゃう……)

だが、呼吸器を圧迫されるサーニヤに彼らの愉悦は届かない。

少女に届くのは自らを穢すペットの意志である。

黙れ、いつまで主人面をしている、立場を思い知れ——と。サーニヤが己以下の立ち位置まで墜ちてしまったことを、本能で理解しているのである。

ごりごりっ! ぐりゅっ、ごりりっ! 喉チンコを豚舌が抉る。デコボコとした喉管を

均すかのような研磨に矮軀がビクビク痙攣する。豚舌が左右にくねり、頭蓋が揺さぶられ桃色の髪が床へ擦りつけられる。

「じゅるぶつ……うぶじゅるつ！　ンンン……んえぐつ、ごつぶ……ごぶじゅつ」

小さな口腔が粘ついた苦悶を吐き出す。止まらない涙が耳元を伝い、床に溜まりを描く。
（——もう止めて……お願い、だから、ポークつ……）

濡れた瞳で必死に訴える。悄然としたその顔に満足したのか、豚はようやくサーニヤから舌を引き抜いた。ずるずると引きずり出される舌肉の長さは、これほどのものがあの小さな喉管に収まっていたのかと驚くほどであった。

「……んごほつ！　げほつ、はつ、はつ……んぐほつ……」

瞳を充血させ、華奢な身体を震わせて咳き込む姫君の姿は哀れだ。

「はあつ……はあつ、はあつ……」

薄っぺらい胸板を上下させて新鮮な酸素を必死に取り入れるサーニヤ。
と、その時である。身体に襲いかかっていた重圧が、不意に消失した。

ポークの体が、少女の上から退いたのだ。

視線を上部に投げれば、そこには抜き身の剣を下げた兵士がいた。

彼に怯えてポークは後退したのだろう。

何のつもりだろうか、兵士はその手に紐を持っていた。彼は、柵ごしにサーニヤの腕を

掴むと身体をうつ伏せに引つ繰り返す。

そうして、手にした紐で、彼の膝ほどの高さにサーニヤの腕を括りつけたのである。

「な、なに……するのよお……っ」

ずるり、と身体を起こし膝を立て、四つん這いのような姿勢で抗議する。喉責めの苦悶が尾を引いて、少女の声を掠れたものにしていった。

「なに、これからが本番というわけだよ」

円卓に並ぶ王族の誰かがそう言つて、兵士が剣を鞘に収める。

——背後で、ポークが床を踏みしめる音がする。

「ほ……ん、ばん？ なに、それ？ それって……ひいつつ！」

あられもない悲鳴が少女の喉から迸る。ポークが、その鼻面を少女の小ぶりなヒップに押し当てたのだ。ミニスカートを捲りあげ、どこか野暮つたいパンティがあらわたなる。まるで幼童の履くもののような、布地がたつぷりのぱんつである。

ポークの舌はそれをも容赦なく引きちぎった。

「きゃああああああああああああつ！」

甲高い羞恥の悲鳴が王族の耳を貫いてゆく。表に晒される幼い肉唇、そこへ触れる豚の鼻息にぞわりとしたものが湧き上がる。

兵士がまた、剣を引き抜く。すると異豚は先ほどと同様に、後方へと身をかわず。

ゆえに衆目へ幼姫の、小さくて可愛らしいヴァギナが丸見えになってしまふのだ。

「ほほ、毛の一本も生えていないぞ。つるつるだ」

「なんとまあ小さいマ○コだ。まるで赤ちゃんみたいなスジじゃないか」

「あれでエクレア姫とそう歳が変わらないのだろうか？」

王族の感想は一樣に、未成熟な性器への嘲笑である。

無毛の股間に、刃物で切り口を入れたように肉のワレメ。ほんのりと口を開いたそこは桃色を濃くして、集中する視線にひくんと震えている。

「いやっ、やだああっ！ 見るなっ、見るなああっ」

あまりの恥ずかしさに腰を振って視線を散らそうとして、けれどその仕草はまるでオスを誘うメスの痴態である。幼花弁より振りまく肉壺の媚臭に、ポークが鼻息を荒くしてゆくのを、羞恥でもう身体中が真っ赤な彼女は気づいていない。

「みる……や、あひいいいっつっ!？」

不意にサーニヤの細腰が猫のように跳ね上がった。ポークの舌が、少女の秘所へと押しつけられたのだ。そうしてまたべろねると、舐め回してゆく。

「やっ……ちよ、ポークっ！ どこなめてるのよおおおっ……!」

小便をするとところを豚に舐められる。埒外の恥辱に全身が発火しそうだ。

割り開かれる秘唇、赤いルビーを思わせるような、繊細な内側も凝まみれになっていく。

ポークは、まるでそうすることが必要だとも言うように、未熟な股間の谷間に大量の唾液をねぶりつけてゆく。

「あ、あそこ、こ、こしよばゆいよおっ……！ やめ、こら、ポークうつ！」

肉付き薄く固めの小尻がビクビクと震え上がる。秘肉を舐められ感じるのは、なんだか腰の裏がむずむずするような感覚だ。ざらりとした肉舌が幼い花びらを割り開き、内側をねぶるたびに、背筋を羽で撫でられるような感覚に襲われて「きゃんっ」と小さな悲鳴をあげてしまう。

「ふふ、準備を整えているな。さてさてこれは楽しみだ」

(た……楽しみって、なにがよおっ……！)

小ぶりのなヒップや、ほっそりとした太股まで、獣臭い汚汁にまみれていく。

鼻息荒くブヒブヒと、呻き這いずる豚舌に舐め溶かされてゆく未熟なヴァギナ。その秘裂の奥に隠れた小さな肉粒がぬじゅると舐められるたび、背中がヒクツと震えて揺れる。「んっ……くっ、い、いいかげんに……しなさいっ、ポークっ」

一体いつまで舐めるのか、私のアソコがそんなに美味しいのか。

と、その言葉を聞いたかのように、ポークが股間から鼻を離れた。そして――。

その巨軀が、サーニャの背中へ覆い被さってきた。

「ひっ?!」一瞬、押し潰されるのではないかと身を強張らせたが、ポークの前肢は柵の上

部に引つかかった。ゴシツクな恰好の幼姫を腹の下に、いまから柵の外へ飛び出そうとでもいうような恰好である。

「な、なにを……なにをしようというのよっ……あんたらはあ……」

巨豚の陰に包まれて、怯えた声音ながらサーニャは周囲をぐるりと睨みつける。

王族たちは誰もが、いやらしい笑みを浮かべて健気な反抗心をあらわにする、小さな彼女を眺めていた。

——そうして、背後まで首をねじ曲げて、少女は見た。

「ツツ!! ヒツ……ヒイイイイイイイイイイイイッ!」

豚の股間で屹立する、異様なまでに膨れあがった肉塊を。

どす黒く、皮膚病の如きイボがいくつも張りついたそれは、男の上腕ほどに太く長い。先のほうは亀の頭のように膨らんで、赤黒くテカテカと輝いている。

あまりにもグロテスク極まりない汚肉の塊——。

その先端が、サーニャの幼いヴァギナへと突きつけられていたのである。

豚の瞳渦巻く、欲望を滾らせる行為の意味をサーニャは知っている。

「そっ……まさか、まさかっ、こ、こいつとっ、こいつと私をつ……!?!」

「おやおや、自分の飼っていたペットに対してこいつとは冷たいな」

笑い、嗤う王族たち。黒くじめついた狂気が、室内に立ちこめてゆく。心胆から凍りつ

「ぶひいつつ……ブヒブヒつ、ぶひいつ！」

豚がぐいぐいと腰を押し上げてゆく。脱力した骨盤はなおもぐばりと広がって豚ペニスを呑み込んでゆく。尻を二つに分かつような拡張感に、少女はうう、と呻き。

「どうして……どうして、エクレアっ……んひいつ、ひいいつ！」

処女であった孔に出し入れされる豚のペニス。

のしかかるように覆い被さつて突き入れられるその有様はまさしく豚同士の交尾だ。

あんな風に、エクレアみたいな人間を相手ですらない。

「あつ、うああ、あつ……ああつ！　もういやあ、いや、いやあああつ……！　いやなの、

ぶたちんぼ、いやなのおつ！　くひいつ、ぶたのなんて、やあなのおつ……！」

じゅっぽじゅっぽと幼いクレパスが捲れて押されてを繰り返す。豚の我慢汁にまみれたピンク色のヒダ肉がぐちゅぐちゅに掻き回されて小突き回される。

（ああ、私のカラダはもう、豚に穢されてしまった……）

とめどなく溢れる涙。イヤイヤと首を振る。桃色の髪が揺れ、涙が哀しく散華する。

もう——いいや。

どうでもいいや。

心が折れる。自身の芯が溶けてゆく。

首を捻り、豚を見上げる。

「ねえ、ポークう……ん、ひあつ……そんなに私のカラダ、きもちいいワケ……？」
 サーニヤの顔は——笑っていた。

鼻息荒くカラダを揺さぶる豚はまるで頷いているように見えた。

「いいよ、じゃあもつと私の……こどもみたいなま○こ、責めまくっていいよ……」
 虚ろな声で微笑みかけて、細腰をくいと持ち上げる。肉鞘がお腹側に押されて、腹腔に
 浮く膨らみがいつそう明確になる。

膣肉がきゅうと収縮し、豚ペニスに抱きついてゆく。

メスマ○コが、オスのペニスに対して、心から屈服した反応であった。

「ブヒイ！ ブヒブヒ、ブヒヒヒッ！」

かつての飼い主を貶めた歓びか、豚の吠え声が熱を帯びる。腹の下に押さえ込んだ、小さな身体。その幼い秘唇を壊さんばかりに、彼は激しい抽送を繰り返す。

ぐちゅっ、ずぶるっ！ ずぶちゅるっ、ずぶちゅ！

「ひっ、くひいっ、んひああつ！ んっ、あう、んぐううう……ッ」

背骨を折れんばかりに刺し入れられ、内臓を裏返すほどに膣襞を引きずられる。そんな
 乱暴な出し入れに、苦しげに呻く少女の声には、どこか——

「んああつ、ポークっ、ポークうっ……ふあつ、きやうんっ！」

口中で鉛を転がすような、甘い響きが混じっていた。

ひとつ奥を突かれるごとに、背筋をゾクゾクとしたものが撫でてゆく。腹腔が破裂しそうな圧迫感は変わらないのに、子宮が扱られるごとに脳内を、快美の電流が駆け抜ける。だって彼女がああなのに。私ばかり苦しんでどうするの。

脳の中、薄暗い領域から何かが語りかけてくる。それに頷く自分がいる。

「はへえっ……！ くひいっ！ あうう、あはっ、あはは……ふにゃあんっ、

ゴリゴリと擦られる膣肉。ドーナツ状の入り口がイボイボに刺激されると頤を蹴り上げるような悦刺激に舌を吐き出し涎を飛ばす。紅に染まりきった拡張陰唇は豚ペニスを貪るようにくわえこんで、その内部肉はウネウネと蠢き、愛撫と奉仕を繰り返す。

「くははっ！ 大口を叩いてなんだその様は。豚との交尾がそんなに愉しいか」

「こ、交尾っ……あはっ、あははっ……交尾、ぶたと、こうびい、いよいよ……」

未成熟な陰唇を豚の巨根で押し潰されながらサーニャは幼貌を笑みに歪める。

ぐじゅつと子宮を押されるたびにカラダの奥底から熱い衝動が湧き上がる。下腹をとろかし、背骨を痺れさせて脳を白熱させる、それは肉の悦楽だ。

痛みもある。苦しみもある。けれど、それもまた気持ちいいのだ。

「いいっ、いいよおっ！ わたし、わたし、わたし、わたし、わたし、わたし……！」

父母の愛を知っている。大事に育てられてきた自覚がある。

宝物のように慈しめられた身体である。

その身体を獣に食られて感じる被虐が、胎内で歓びへと変貌してゆく。

「豚ちゃんば、きもひいいっ……！ お姫様のま○こズボズボされりゅのいいのおっ」

大きな豚の睾丸が、股間にベチベチ叩きつけられる。少女の狭苦しい幼孔はギュウギュウとペニスを抱きしめて、喜悅の涎を垂れ流す。眉根が垂れ、口の端からは涎を垂らして――その有様は映像に映る、快樂に堕ちたエクレアの写し身のようなようだ。

「はっはっは。こどもみたいなマ○コをズボズボされて悦んでおるわい」

「あ、あああつ！ そう、なのおっ、わたひの、こどもま○こいっばいじゅぼじゅぼ、きもひいいのっ……！ ぶたちんぼ、奥にちゅうちゅうしてくりゅのおっ……！」
挽き潰された処女膜を、穿り出すような抽送に少女の面貌は甘く崩れる。

「ブヒイツ！ ブヒブヒっ！ ブヒヒィ！」

豚ペニスを噛み締められて腰を震わせるポークの声も熱の濁りを増してゆく。

亀頭の前から垂れ流される、穢れきった我慢汁が少女の未成熟な陰唇からドクドクと溢れ出してくる。種属すら違う生物の肉孔は、それほどに気持ちいいのだろうか。

「あれほど生意気だった小娘が、見ろ、あの顔を」

「豚に犯されてヒィヒィ鳴いておりますな。ちっちゃな孔がよくもまあ拡がること」

「さつきまで処女であったのに、女というのはまったく下等ですなあ」

その有様を、豪奢な食事を口に運び王族たちは眺めている。

ああ、彼らにとって私は人ではなくただ嗜虐心を満足させるための獣であり――。

「あつ……ふああつ、わたひ、のおつ……あそこ、ぶたのあなあ……」

自らが人以下にまで墜ちたという現実が、その被虐が脳髓に喜びを撒き散らす。

ドーナツ状の入り口を、亀頭にぶつぶつぶつぶ押しされるのが気持ちいい。ヒダヒダを、イボつき棍棒がズリズリ擦過するのがたまらない。薄い乳房がたゆたゆ揺れて、その先端に色づく桃色粒がひくひくと戦慄く。

「いひつ……いひいよおつ！　ぶたちんぽ、あたひのぶたのあなにハマるのがきもひいよつ！　ああ、んひいつ、エクレア、コレ、とつてもきもちいいよおつ……！！」

両手両脚にぎゅうつと力を籠めて、顎を跳ね上げる。ツインテールが汗を散らす、その先に――はばかりなく喜びを唄うエクレアの映像がある。肉根をくわえた腰を淫らに踊らせる娼婦のような彼女の姿に、サーニャの官能が熱く反応する。

もつと。

もつと。

「ポークうう……もつと、もつといいよ、わたひのぶたあな抉っていいよつ！」

乱れゆく半熟少女はぐいと尻を持ち上げて、幼肉の奥まで豚ペニスを招き入れる。あどけない肢体と顔のその有様は、王族たちの愉悦を心地よく刺激した。

ぐつちゅ！　ぐちゅずぶちゅつ！　にちゆるつ！

「あはへっ、くひいっつ！　いい、ひいっつ……！　あひゆい、あひゆいの、おなかのなか、いっばいだよっつ……！　あたまのなか、破裂しそうだよおっ……あああつ」

身体を揺さぶられ吐き出す舌肉がぶらぶら揺れている。とろけるような甘声に、艶めくような高音が混じってゆく。身のうちから溢れ出す恍惚に少女は瞳を輝かせる。

ロリータ少女の小さなお腹をあり得ないくらいに拡張して、ブヒイブヒイと豚が鳴く。じゅっばじゅっばと響く水音。

黒白ドレスをピツタリと張りつけた肢体は軽々と、ツインテールを揺らして踊る。淫楽が身体の全てを犯してゆく。幼い形の細腰がヒクヒクと痙攣を始める。

「な、なにかくるよおっ……いっばい、いっばいくるうっ……あ、あひああつ！」

ぬらつきとろける膣肉から切なく熱い衝動がこみ上げてくる。自分自身が消失してしまふようなそれは、生まれて初めて感じる絶頂への予感であった。

ポークの腰つきはいっそうに激しさを増す。まるで何かに追いつてられるように。

「ひいっ、はげひっ、はげひいっ！　ぶたちんぽ、おなかのなかでびくびくって……ふるえてっ、にゃああつ、ぶたあながこわれひゃうっ、ふああああつ！」

未熟な身体がわななき震える。

か細く折れそうな四肢が紅に染まる。

性の知識などないような、あどけない顔が淫らに溶け崩れてゆく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>